

〔直訳〕

24 ない ある 弟子は まさる 師に
またない 僕は まさる 彼の主人に。
25 十分に 弟子は なることで ように 彼の師の
そして 僕は ように 彼の主人の。
もし 一家の主人を ベルゼブルと 彼らが呼んだのなら、
いわんや 彼の家の者たちを

26 そこでない 恐れなさい 彼ら^らを。
なぜなら何もなし ある
覆われているもの ところの ない 覆いを取られるだろう
そして 隠されているもの ところの ない 知られるだろう。

27 ところのことを 私が言う あなたがたに 闇の中で
言いなさい 光の中で、
そして ところのことを 耳の中へ あなたがたが聞く
告げなさい 屋根の上で。

28 そして ない 恐れなさい
殺す者たちを 体を、
だが魂を ない できる者たち 殺すことの。
だが恐れていなさい むしろ
できる方を 魂をも 体をも 滅ぼすことの ゲヘナの中で。
29 ではないか 二つの すすめは アサリオンで 売られる。
そして 一つは それらの中の ない 落ちるだろう 地の上に
あなたがたの父なしで。

30 だがあなたがたの 髪は 頭の すべて 数えられて いる。
31 そこでない 恐れなさい。
多くの すすめより 価値がある あなたがたは。

32 そこで誰でもすべて 認めるだろう 私を 人々の前で、
認めるだろう 私も 彼を 天の中の私の父の前で。
33 だが誰であれ 否定する 私を 人々の前で、
否定するだろう 私も 彼を 天の中の私の父の前で。

「新共同訳」

24 「弟子は師にまさるものではなく、僕は主人にまさるものではない。 25 弟子は師のように、僕は主人のようになれば、それで十分である。家の主人がベルゼブルと言われるのなら、その家族の者はもつとひどく言われることだろう。」

26 「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。 27 わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。 28 体を殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。 29 二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しが必要ならば、地に落ちることはない。 30 あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。 31 だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

32 「だから、だれでも人々の前で自分をわたしの仲間であると言ひ表す者は、わたしも天の父の前で、その人をわたしの仲間であると言ひ表す。 33 しかし、人々の前でわたしを知らないと言ひ者は、わたしも天の父の前で、その人を知らないと言ひ。」

① 弟子は師にまさるものではない (24—25節)

①a 「もしベルゼブルと呼んだのなら」

事実の仮定。9章34節「あの男は悪霊の頭力で悪霊を追い出している」を参照。マタイとルカでは「ベルゼブル」を「悪霊の頭」としている(マタ一二24、ルカ一一15)。「ベルゼブル」の語源は不明で、諸説がある。エクロン町の神「バアル・ゼブブ(蠅の主)」(王下一2)、アラム語の「ベエールゼブール(住居の主)」などが考えられている。後者であれば、「もし一家の主人を住居の主と呼んだのなら」となり、意味の重なりを見ることができるといえる。

①b 「師と弟子」「主人と僕」「一家の主人と家の者」

弟子や僕は、師や主人を超えることはなく、同じようになることで満足するべきである。中傷や非難に関しても、一家の主人が受けたのだから、言うまでもなく家の者はそれらを受けることになる。

② 恐れてはならない (26節)

②a 「ない 恐れなさい」

「恐れなさい」と訳した命令の形は、これから行為を始めるようにと命じるときに命令法。つまり、「恐れ始めなさい」を意味する。その前に「ない」という否定詞が置かれているから、まだ始められてはいない行為を一般的に禁止する言い方になる。従って、未来に起こるかも知れない恐れを否定して、「恐れてはならない」とイエスは命じたことになる。

②b 「覆いを取られないだろう」ところの覆われているものは何もない」

②c 「覆いを取られる」と直訳した動詞はアポカリュプトー。前置詞アポ(から・離れて)と動詞カリュプトー(覆う)との合成動詞。「覆いを取る」が原義で、隠れたものをあらわにすること、秘密を打ち明けることを表す。新約聖書には26回の用例があり、心の思いが「あらわにな

る」と述べるルカ2章35節を除けば、神的な啓示に関連して使われる。「こころは「覆う」（カリュプトー）と同根の「覆いを取る」（アポカリユプトー）を用いて、神の啓示の確かさを強調している。

① イエスは「人々を恐れるな。覆われているもので覆いを取られないものはない」と述べ、宣教の働きが神の導きの下にあると弟子たちに教え、彼らを励ます。並行記事ルカ12章2節では、同様の語句がファリサイ派の偽善に対する警告に使われる。また、イエスはその御業を知恵ある者や賢い者には隠し、幼子のような者に「示した」父を賛美する（マタ11・25）。父を知る者とは、子と、子が「示そう」と思う者だけである（マタ11・27並行）。メシアであるイエスへの信仰を言い表したペトロに、イエスは「人間ではなく、わたしの天の父があなたに啓示したのだ」と言って祝福する（一六17）。

② この段落は未来に起こるかも知れないことを禁止する言い方を用いて、「彼らを恐れてはならない」と命じている。この「彼ら」は10章17節で「人々を警戒しなさい」と言われる「人々」であり、弟子たちを地方法院に引き渡し、会堂で鞭打つ迫害者である。弟子は迫害者を警戒すべきであるが、恐れてはならない。

③ 32節と33節には「人々」という語が現れる。また32節の「私（イエス）を認める」という表現はイエスへの信仰を告白することを意味するから、「証し」とも関連づけられている。26―33節は、26節の「彼ら（迫害する人々）」と、32・33節の「人々」によって囲い込まれている。この人々を恐れるなら、イエスを否定する者になる（33節）。イエスへの不信仰は人々への恐れから起こるのだから、イエスはその恐れが不必要であることを明らかにする。そして、イエスを認める者となるようにと励ます。

③ 言いなさい、告げなさい（27節）

① 「言いなさい…告げなさい」

この命令法もこれから始める行為を命じる形。弟子はまだ、イエスの語ることを言うことも、耳に聞くことを告げることとしてはいない。

② 26節では「恐れてはならない（恐れ始めるな）」と語って、未来に起こる恐れを禁じ、28―31節では「恐れていてはならない」とあって、現在の恐れを禁じている。二つの「恐れるな」に挟まれたこの段落では、恐れずに行うべきことが命じられる。それは「言いなさい…告げなさい」である。

③ この節を並行箇所であるルカ12章3節と比較すると、マタイが意図する主張がはっきりとする。わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。（マタ10・27）

だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。（ルカ11・3）

④ マタイでは暗闇で言う者は「私」であるが、ルカでは「あなたがた」。

⑤ マタイは「言いなさい」「告げなさい」と弟子に命じているが、ルカは「あなたがたが言った」「言い広められる」と直説法で述べている。

⑦従って、ルカ12章3節は、弟子が告げている使信は、今は力のないものでも、終わりの日にはその正しさが明らかにされる、という意味になる。ルカの視点は未来に置かれている。しかし、マタイの視点は現在にある。イエスが「暗闇で」、つまり弟子に個人的に語ったことを、弟子はいま「光の中で」言い始めなければならぬ。「言いなさい」と「告げなさい」は行為の開始を強調する命令形である。マタイは、迫害者となる「人々」にひるむことなく、イエスの語ったことを告げるといふ活動を開始するように求めている。

④恐れているのを止めなさい（28—31節）

①「ない 恐れていなさい」

「恐れていなさい」は26節とは違って、すでに行われている動作の継続を命じるときの命令法であるから、「恐れ続けなさい」を意味する。その前に「ない」という否定詞が置かれているので、すでに始まっている行為の禁止を意味する。つまり「いま恐れているのを止めなさい」の意味になる。31節も同じであるので、この段落は「恐れているのを止めなさい」によって囲い込まれている。その間に「だがむしろ恐れていなさい」という命令が置かれ、弟子が恐れるべきものが書かれている。それは「魂も体も滅ぼすことのできる神」である。

②「魂」

人間は他人の「体」を殺せても、「魂」を殺すことはできない。しかし、神は「体」だけでなく、「魂」をも滅ぼすことができる。このように、人間の命を支配できるのはただ神だけである。また、使徒言行録2章27節では「あなたは、わたしの魂を陰府に捨てておかず」と述べられ、人間の命は、死をもって終わるものではないとされている。神は「体と魂」を、死を超えて支配する方。弟子は、この世での死ではなく、ゲヘナでの滅びを恐れるべきである。

③「ゲヘナ」（ゲー「ベン」ヒンノーム）

「ヒンノムの「子らの」谷」の意味。元は、エルサレムの南にあるヒンノムの谷のこと。異教の神への幼児犠牲が行われた場所であり、後に町の汚物、動物や罪人の死体をそこで焼却した。そのため、死後、悪人が罰せられる場所、つまり地獄の同義語となった。

④「ではないか」

この問いかけは肯定の答えを期待する形。従って、「…アサリオンで売られるではないか」との問いかけは、「その通りです」という答えを期待している。

⑤「アサリオン」

ローマの銅貨で、貨幣価値は一デナリの約十六分の一。一デナリは当時の労働者の賃金の一日分にあたる。

⑥「あなたがたの父なしで」

「父が承認しないで」を意味する。「二羽のすずめは一アサリオンで売られるではないか」とあるように、すずめは一羽では売り物にならない。そんな一羽のすずめでも、父が認めなければ地に落ちることない。このように述べて、父の支配の絶対性を主張している。

⑤天の父の前で（32—33節）

①「私を認めるだろう」

「認める」と訳した動詞ホモロゲオーは文字通りには「同じことを言う・同意する」を意味する。この語は26回使われており（1ヨハ5、マタ4、ヨハ4、使3、ルカ2、ロマ2、ヘブ2）、次のような意味を持っている。

⑦ 世俗的・ヘレニズム的用法で「約束する・承諾する」。ヘロデは義理の娘に、望みをかなえてやることを「約束する」（マタ一四7）。

⑧ 「告白する・言い表す・公言する」の意味で最もよく使われる。法律用語として、「言い表す・公言する」。パウロは法廷でキリストに対する、また父である神に対する信仰を「告白し」（使二四14）、洗礼者ヨハネも自分がメシアではないことを「言い表す」（ヨハ一20）。

⑨ 法律用語としての用法から転じて、「罪を認め、告白する」の意味で用いられる。罪を正直に認め、言い表すなら、神は真実で公正であるから、罪を赦す。共同体やキリスト者は罪の赦し、すなわちイエス・キリストによる救いを得たことを「公に表明する」。告白は、イエス・キリストが主であることを認め、神が彼を死者の中からよみがえらせたことにより、キリスト者の共同体が救われたことを証言することである。従って、告白とは「キリスト者が自分自身から目を転じ、自分に与えられた身分と恵みが、すべて神の行った業によるのだということ」を認めることである」と言える。

⑩ 「私を否定する」

⑪ 「否定する」はアルネオマイ。この語がホモロゲオーと一緒に使われる時は、常に「イエスから離れる」の意味で用いられる。人々の前でイエスを自分の仲間だと言うか、イエスを知らないとするかによって、神が裁きの時に下す判決が決まる。キリスト者は絶えずキリストに結ばれて生きているので、人前で（例えば迫害の時に法廷で）告白を行うのは、神の裁きの座の前で告白するのと同じことである。

⑫ ここという「告白」は、必ずしも人々の前で言う言葉だけではなく、その人の生活全体によって示される従順を指す。こうした徹底した従順を示さないで、のんびりと自分が救われるのは当たり前だと思っていれば、イエスは裁きの時に、「あなたたちのことは全然知らない」（マタ七23）とその人を否む。こうして最後には、あらゆるものがイエスはキリストであると告白し、認め、たたえることになる（フィリ二11）。

⑬ 32—33節は26—33節の結びとなっている。26—31節の中心は27節の「言いなさい・告げなさい」にある。26節は未来の恐れを神が除くことを明らかにし、28—31節は現在の恐れを神が除くことを告げて、27節の命令を支えている。イエスの弟子が宣教を開始するなら、人々は迫害者となって迫って来る。しかし、神は未来の恐れからも現在の恐れからも弟子を守る。神の支配を信頼するなら、弟子は「人々の前で」イエスを認めることになる。そして、イエスはその者を「天の父の前で」認める。今、イエスの使信を告げ始める者は、終わりの日に天の父の前で認められるという祝福が約束されている。しかし、今、イエスの使信を告げないなら、その人は終わりの日に天の父の前で否定される。

⑭ 命を支え、救いを与える神を見つめる

⑮ 十二人の弟子をイエスは宣教へと遣わす。それは「羊を狼の中へ送り入れるようなもの」である（マタ一〇16）。弟子たちはイエスの言葉を宣べ伝え、イエスを証しする。そのために、人々は

弟子を迫害する。しかし、弟子はそのとき何を言おうかと心配する必要はない。語るのは弟子ではなく、弟子を通して父の霊が語るからである。イエスの言葉を告げる者は家族からも迫害され、「わたしの名のためにすべての人に憎まれる」とも言われている。しかし他方では、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」とも約束されており、人の子の再臨の近いことも宣言されている（マタ一〇16—23）。

⑥ 24節では弟子は師と、僕は主人と同じであることが語られ、25節では、「人々が一家の主人がベルゼブルと呼んで中傷するなら、言うまでもなく、家の者もひどく言われる」と述べて、弟子が受ける迫害が厳しいものであることが語られている。

⑦ これに続く26節は「そこで（だから）」と始まるが、これは、22—23節に述べられている「人の子の再臨と救い」へと目を向けさせる。そうしてから、「恐れてはならない」と命じる。迫害者となるかも知れない人々を恐れてはならない。このように否定するのは、「覆われているもので覆いを取られないものではなく、隠されているもので知られないものはない」からである。弟子にはいま知られていても、人々には隠されている事柄が覆いを取られ、誰の目にも真実さがあからさまにされる日が来る。迫害を前にしてひるんでいる弟子たちに、イエスは「恐れてはならない」と命じる。この命令は、人の子の再臨と救いの約束に支えられ、さらに弟子の宣教の正しさが明らかにされる終わりの日が確実に到来するという確信に支えられている。

⑧ 28節と31節の命令形は「恐れるのを止めなさい」を意味し、現在の恐れを否定する。弟子たちは「体を殺す者」を恐れるのを止めなければならない。「体を殺す者」は「魂を殺すことのできない者」である。弟子が恐れなければならないのは、「魂も体も滅ぼすことのできる方」である。命を支配するのは神だけである。一羽では売り物にならないはずでさえもその命は神の許しなしには奪われることはない。神がすずめを守るなら、まして弟子は神の保護からもれることはありえない。

⑨ 終わりの時には弟子の宣教の正しさが明らかにされる（26節）。そして弟子の命は神の保護のもとにある（28—31節）。未来の恐れからも、現在の恐れからも弟子は神によって守られている。だから、イエスは「光の中で言いなさい」と確信を込めて命じる。

⑩ 弟子は、隠されていることが明らかにされる終わりの日の到来を信じ、死を超えて命を支配するのは神だけであることを信じるなら、「人々の前で」イエスを認める者となる。そうであるなら、イエスを否定する者があるとすれば、それは神の支配を信じられないからである。

⑪ イエスを認める者には、天の父の前で認められるという救いが約束されている。弟子が宣教するのは自分の救いのためだけではない。むしろ、今は覆われて真実が見えないために迫害者となる人々の救いのために、弟子はイエスの言葉を告げ広める。そのような弟子をイエスは仲間と認める。

⑫ イエスの言葉を光の中で言い、イエスを主と告白する力は神から与えられる。人々が迫害者となつて迫ってくる将来も現在も、イエスは恐れる必要のないことを教える。イエスは、人々を恐れるのではなく、「神を恐れていなさい」と命じて、弟子たちの視線を命の主である神に向けさせる。迫害者に囲まれる中でも弟子の命を支えているのは神であり、イエスから託された言葉が真実であることを明らかにするのも神だからである。未来の確かな救いがあるから、人は現在の苦しみを生きることができる。